

書評・紹介

劉 錚, 『中国的人口』

北京・人民出版社, 1982年4月, 41ページ

中国の総人口は、1982年7月1日の第3回人口センサスの結果、10億3,188万2,511人（台湾・香港・マカオを除くと、10億0817万5,288人）と発表された。世界の約22.6%を占める巨大な数である。その中国でいま四つの現代化の早期実現をめざし、厳しい「一人っ子政策」がすすめられ、この人類史的壮大な実験に対して世界の目が集中している。こうした中で、まず中国において人口問題がどのように現状認識され、中国自らがいかなる展望をみすえているのか等々についてを知るには、本書は絶好の手引き書といえよう。

本書は「中国社会主义現代化シリーズ」の中の一冊として出版されたものである。その内容は、「中国の人口問題の正しい解決は、中国の経済建設、社会発展、社会主义現代化の実現ときわめて密接な関係がある」とし、(1)中国の直面する人口問題、(2)人口抑制活動の進展、(3)中国人口の現状と今後の抑制目標、(4)中国の人口政策の全4章からなる。つまり、直面する人口問題を量と質の両面から掘り下げ、今後の抑制目標は「新生児のほぼ20%が第3子である現状から……1985年に平均して夫婦一組が1.6人または1.7人の子供を生むようになれば総人口を今世紀末に12億以内にとどめることができる」とし、一人っ子の提唱は「すべての夫婦がみな一人しか子供を生まないよう要求しているのではなく、永遠にこの一人しか生まない政策を推進するのでもないことは言うまでもない。もしこうでなければ当然にしてゆゆしい老齡化問題と青年労働力不足の問題が現われる。しかしわれわれは社会主义国家であるから将来こうした事態を予見して計画的かつ適時に人口政策を改め、その出現を防げることができる」と記する。

著者の劉錚は、中国人民大学人口理論研究所長であり、中国人口学会副会長・国務院計画出産委員会の委員でもあり、名実ともに今日の中国を代表する人口学者である。雑誌『人口研究』の編集、共著で『人口統計学』中国人民大学出版社、1981年3月、406頁の刊行、その他国際人口会議等にも常に中国を代表して出席する中心的人物である。

本書への直接的批判ということではなく、むしろ今日の中国の人口政策に対する疑問として以下2点を指摘しておきたい。(1)国家社会計画に人口計画を組み入れ、物質的生産の計画と人口計画の二つのバランスをとるという考え方はすばらしいとしても、その政策決定過程のイニシアティブへの懸念である。つまり今世紀末に人民一人あたり経済成長を4倍にするという大前提に対し、そのために人口計画は12億以内にとどめ、さらにはそのための人口出産割りあて計画が末端各級政府にはりめぐらされるといった、そのような人口計画が、経済計画に従属化していないかへの疑問である（両者の歯車のサイクルは異なり短期的成果を要望する経済への従属には懸念がつきまとう。それは人口資質の面で科学技術に役だつ人材教育の推進にも同類の姿勢をみるのであるが、やや目標が先行しすぎ、農村に伝統的倫理観念である男尊女卑、多子多福といった思想の払拭がまにあわず、女兒の間引きなどは農民の抵抗のあらわれといえよう。

(2)「被扶養老人は徐々にふえるかも知れないが被扶養未成年人口も同時に減り、二つの要素が相殺するので扶養者数は今後25年間ずっと下降線をたどる」というように老人と子供をこみで扱い高齡化問題に対してきわめて鈍感である。特に中国の都市労働者における退職年金が著しく高く、今後老年人口が増大し、出産抑制において生産年齢人口が先細りするとき、この重圧に支えきれまいという疑問はなお強く、ぬぐいきれない。おそらくは近い将来、若者の就業機会、賃金体系、社会秩序等々から総合的な検討がなされていかざるをえないであろう。なお本書の日本語訳が于光遠主編『中国の社会主义現代化建設』北京外文出版社から出版予定である。なお第2章を除いた部分が評者編・解説『中国の人口問題』現代のエスプリ190号、至文堂に転載済みである。

(若林敬子)